

中学校

平成 11 年 度

教育研究員研究報告書

道 徳

東京都教育委員会

平成11年度

教育研究員名簿（道徳）

分科 会名	区市町 村名	学 校 名	氏 名
第一 分科 会	墨 田 目 黒 世 田 谷 北 足 立 立 川 調 布	立 花 中 学 校	○ 尾 科 正 幸
		第 二 中 学 校	新 井 し の ぶ
		弦 巻 中 学 校	小 山 博 史
		豊 島 中 学 校	伊 藤 光 子
		第 十 六 中 学 校	松 森 由 美 子
		第 六 中 学 校	糠 信 正 則
		神 代 中 学 校	篠 塚 浩 幸
第二 分科 会	品 川 大 田 豊 島 練 馬 八 王 子 青 梅 東 久 留 米	八 潮 南 中 学 校	深 見 和 子
		貝 塚 中 学 校	能 登 美 和
		第 十 中 学 校	稲 津 貴 広
		石 神 井 中 学 校	星 野 純 二
		横 山 中 学 校	◎ 山 川 毅
		第 二 中 学 校	田 村 文 雄
		久 留 米 中 学 校	安 藤 俊 弥

◎ 世話人 ○ 副世話人

担当 教育庁指導部主任指導主事 峯 川 一 義
都立教育研究所指導主事 中 嶋 隆 雄

研究主題

生徒の心に響く道德の時間の指導

目 次

I	研究主題設定の理由	2
II	内容項目 3-(3) 「生きる喜び」についての指導 (第1分科会)	4
1	主題設定の理由	4
2	研究の内容と方法	5
(1)	内容項目 3-(3)のとらえ方	5
(2)	生徒の実態と指導のねらい	6
(3)	指導の工夫	7
(4)	指導事例 (第2学年)	9
3	内容項目 3-(3) 「生きる喜び」のまとめ	13
III	内容項目 4-(1) 「集団生活の向上」についての指導 (第2分科会)	14
1	主題設定の理由	14
2	研究の内容と方法	15
(1)	内容項目 4-(1)のとらえかた	15
(2)	生徒の実態	17
(3)	指導の工夫	18
(4)	指導事例 (第2学年)	20
3	内容項目 4-(1) 「集団生活の向上」についてのまとめ	23
IV	まとめと今後の課題	24

生徒の心に響く道徳の時間の指導

I 研究主題設定の理由

21世紀を間近に控えた現代社会においては、国際化、情報化、科学技術の発達、環境問題への関心の高まり、高齢化、少子化等の様々な面で大きく変化している。一方、生徒を取り巻く状況を見ると、いじめや不登校の問題、学校外での社会体験の不足などが指摘され、現在の中학생たちにも、自立心や忍耐力の欠如、情緒や社会性の未発達、規範意識の低さなど、課題となる様々な傾向が著しくなっている。

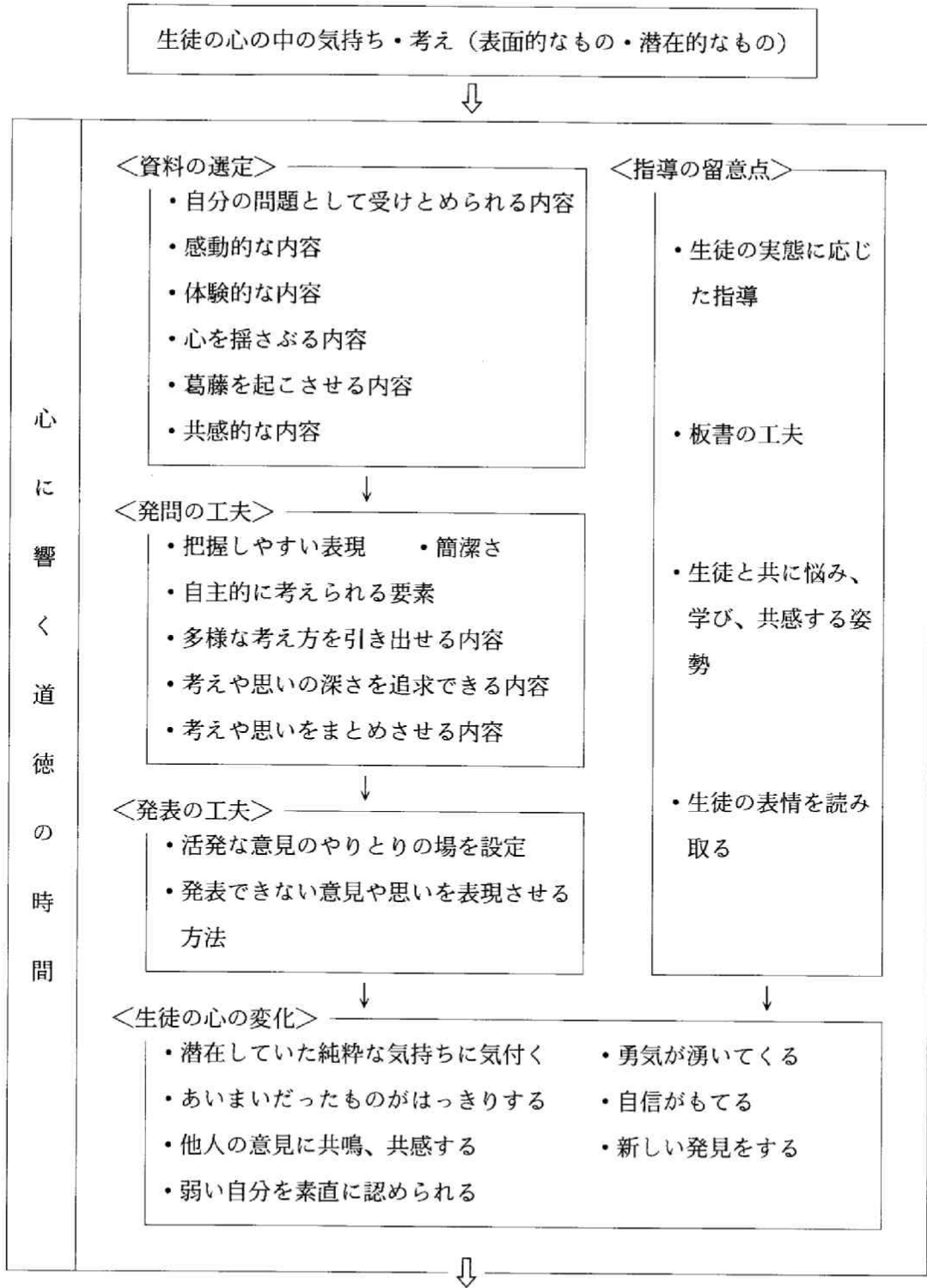
平成10年に公表された、中央教育審議会の「幼児期からの心の教育の在り方について」の答申では、子どもたちの心を育てる家庭や学校、地域社会の教育力の低下が指摘されている。核家族化の影響に加え、子どもたちは地域社会という場でも社会規範を身につける機会を失いつつある。それだけに、学校は今まで以上に、家庭、地域社会と一体となって「心を育てる教育」を担っていかなければならない。そして、その中心となるのが道徳教育であり、そのかなめである道徳の時間の充実をさらに図っていかなければならない。

そこで、私たち研究員は道徳の時間が、どのようにしたら子どもたち、特に思春期にある中學生たちにとって意義のある時間となるのか、まずこの点について道徳教育の原点に立ち戻って考えた。その結果、「生徒の心に響くような道徳の時間の指導を工夫していくことが、生徒の心を育てることになるのではないか」という仮説に到達した。

中學生の時期には、一般に自らの人生についての関心が高くなり、自分の人生をよりよく生きたいという内からの願いが強くなる。その思いを引き出し、生徒自らが主体的に考え、その願いの実現に向けて意欲的に取り組んでいく。その一つの原因となるような道徳の時間にするためには、生徒一人一人が葛藤や感動などを体験することによって、自分を見つめ、自分の生き方を模索し、道徳的価値の自覚を深め、道徳的実践力を身に付けていけるような指導が要求されるのである。

以上のことから、研究主題は昨年に引き続き「生徒の心に響く道徳の時間の指導」とし、いかにしたら生徒の心に響く道徳授業ができるかという点に力点を注いだ。第一分科会は、3の柱——主として自然や崇高なもののかかわりに関すること——の、3-(3)「人間には弱さ醜さもあるが、それを克服する強さや気高さがあることを信じて、人間として生きること喜びを見いだすように努める。」を内容として取り上げた。また、第二分科会は、4の柱——主として集団や社会とのかかわりに関すること——の、4-(1)「自己が属する様々な集団の意義についての理解を深め、役割と責任を自覚し、協力し合って集団生活の向上に努める。」の内容項目を取り上げ、それぞれ内容項目のとらえ方、生徒の実態把握、資料の選定、指導過程や指導方法の工夫などについて研究を進め、主題に迫りたいと考えた。

《心に響く道徳の時間とは…》



☆自らよりよく生きる力を伸ばす意欲をもつ ☆自律的な考え方、行動ができる

☆かかわり方を見つめ、発展させる

自分自身

他人

自然や崇高なもの

集団や社会

道徳的価値の高まり・深まり

道徳的実践力・道徳性の発達

Ⅱ 内容項目3-(3) 「生きる喜び」についての指導（第1分科会）

1 主題設定の理由

「自分は、どう生きていけばいいのだろうか」。中学生の時期には、自分の生き方について真剣に考えるようになり、人間として「生きること」のすばらしさを探求し始めるようになる。

一方、生徒を取り巻く社会は様々な面で大きく変化し価値観も多様化し、生徒がよりよい生き方を追求することが、難しくなっている。また、人間関係の希薄さから自己中心的に考えてしまったり、人間不信に陥り孤立し、生きる喜びを実感できない状況がある。

中学生というこの時期には、人間が困難を克服する強さや気高さをもつとともに、同じ人間が内なる心に弱さや醜さを併せもっていることもうすうすながら気付き始めている。自分勝手な振る舞いをする、現実から逃避する、自らの心を偽ったり他者にうそをつく、他人をねたんだり疑ったりするなどの感情は、中学生ならずとも人間だれしものが、もっているものである。そうした人間が、自らの弱さや醜さを乗り越えていく姿に触れたとき、私たちは人間のもつすばらしさに目を開かされるのが少なくない。ありのままの人間の姿を素直に認め、人間に対する共感的理解や人生を温かい態度でいとおしんでいくことが求められているのである。

したがって、この時期の中学生に対しては、まずもって人間には、だれにでも弱さや醜さがあるということをお互いに認めあえるようにしていくことが大切である。そのためには、生徒が自分をしっかりと見つめ、自分をよく知ることが必要であると考えた。上述のように、弱さや醜さをもつことは人間にとってごく自然なことであるが、よりよく生きたいという願いから、その弱さや醜さと心の中で葛藤している強さや気高さの存在に気付かせたいと考えた。自分も一人の人間として他の人と同じように、弱さや醜さをもち、それを乗り越えて生きようとしているのを知ることにより、人間として生きていることの深い意味を自覚するのである。

第一分科会では、内容項目3-3「生きる喜び」を窓口として心に響く道徳の時間を創造していくこととした。指導に当たっての観点として、第一に、人間の弱さや醜さはだれもがもつが、それを認めるだけでなく、人間としての良心と葛藤する場面を一人一人の生徒の心の内につくっていくことが必要であると考えた。第二に、資料選択に当たって、人間の強さや気高さが伝わり、感動的な内容である資料を取り上げることが大切であると考えた。第三に、生徒の人間関係を広げ、身近な仲間の中にも強さや気高さを発揮しながら生活していることを実感させながら、道徳の授業を進めることを考えた。

研究を進めるに当たっては、以下の仮説に基づいて、内容項目のとらえ方、生徒の実態、教材の選択、発問の工夫等について行うこととした。

仮説

道徳の時間を生徒の心に響くように工夫していくことで、人間には、弱さや醜さをもっていることを素直に認めながらも、それを克服し、人間の強さや気高さを発揮したよりよい生き方について自覚するであろう。

2 研究の内容と方法

(1) 内容項目3-(3) のとらえ方

内容項目3-(3)は「人間は弱さや醜さを克服する強さや気高さがあることを信じて人間として生きる喜びを見いだすように努めること」が指導内容である。

人間が生きていく時、ありのままの人間は決して完全なものではない。だれしものが弱さや醜さとそれを乗り越える強さや気高さをも併せもっている。目の前にいる中学生も、ある時は自らの心の弱さや脆さに負けてしまうこともあり、またある時には、迷い悩みながらも困難にうち克ったという経験をしながら、人間として成長していくのである。

人間は自らの意志で行動を決定する様々な場面で、時として易きに流されることがある。しかし、それは良心による悩みや苦しみをもち、良心の呵責に耐えられない自分自身の存在を深く認識して思い悩むのである。

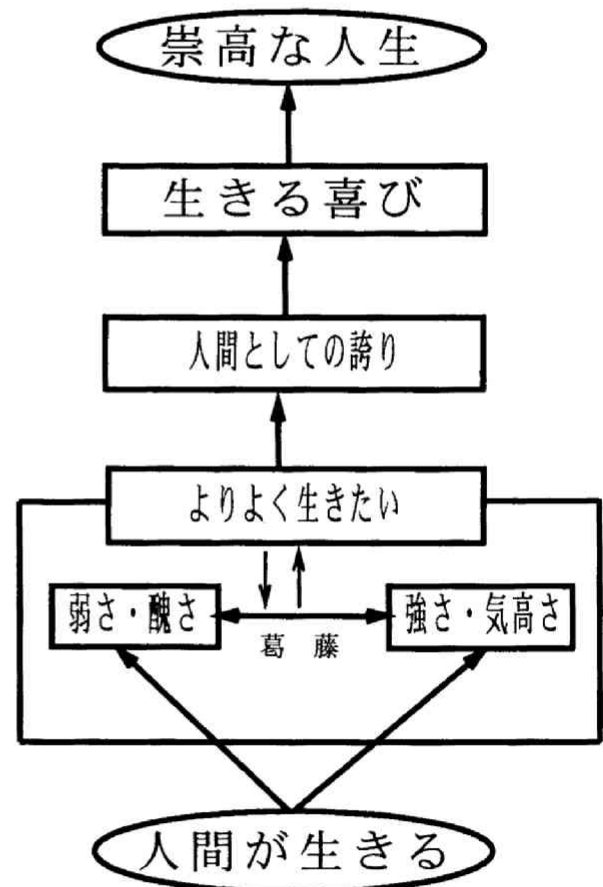
右の図が示すように、人間の中には弱さや醜さと強さや気高さとは、心のなかで引き合い葛藤を起こしている。私たちは、このことを指導の着眼点としてとらえた。

人間は自らの心の弱さや誘惑に負けてしまい、他人に迷惑をかけたり、思いやりのない言動に走ったりすることもあるが、善いこと正しいことと分かっているながらも、それが行動に表せず自責の念を抱いたりする。そうしたあるがままの人間の姿を率直に認めながらも、易きに流れずそれを乗り越えたときに、人間として生きる喜びを見いだすものである。

ここで言う人間としての生きる喜びとは、自己満足ではなく人からほめられたり、認められたりした喜び、人間としての誇りや深い人間愛、崇高な人生を目指して共に生きていくという喜びである。

指導に当たっては、人間は弱さ、醜さをもっていること、自分だけが弱いのではないということに気付かせ、それを乗り越え、人間らしくよりよい人生をだれもが送りたいと願っていることを自覚させたい。そして、生徒たちに夢や希望などの生きる喜びを見いだしていく態度を養っていくことがこの内容項目3-(3)の指導の重要な視点である。この視点から、資料の選定、指導過程や発問の工夫等を行うこととした。

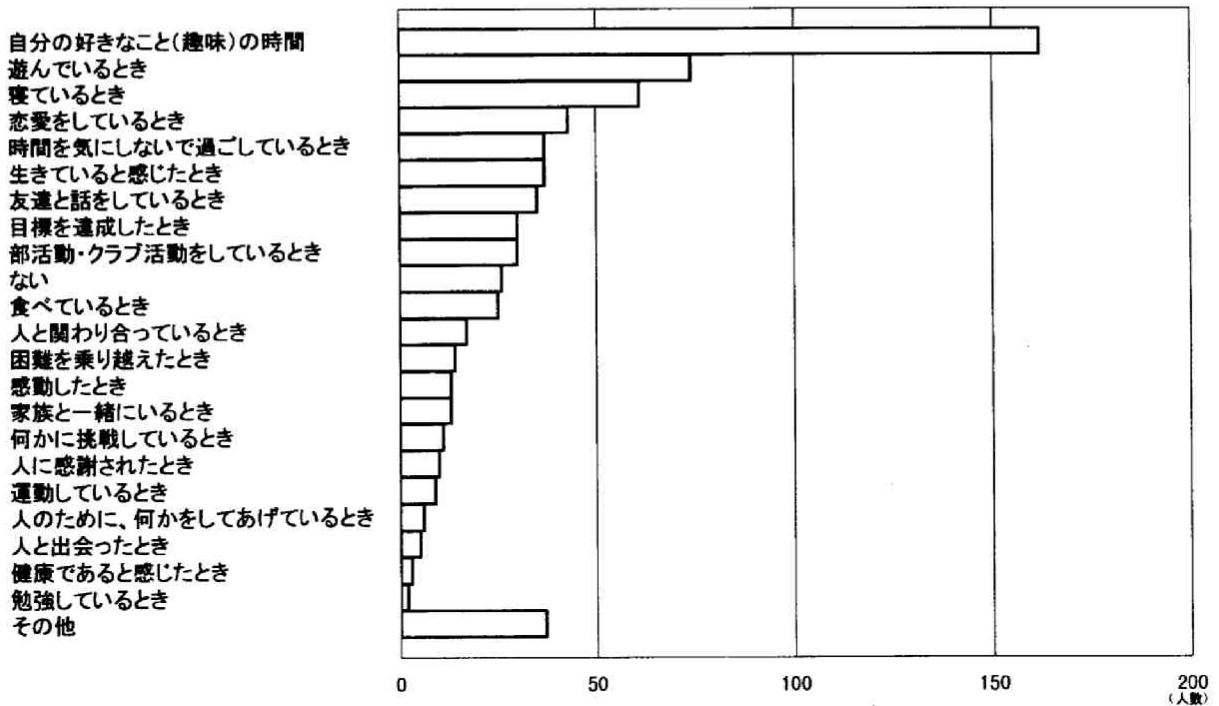
内容項目3-(3)のとらえ方



(2) 生徒の実態と指導のねらい

第一分科会では、まず生徒の実態を把握するために、『あなたにとって生きる喜びを感じるのは、どんなときですか。』というアンケート調査を実施した（都内公立中学校6校 第1学年～第3学年700人 平成11年10月実施）。結果は以下のグラフの通りである。

あなたにとって、生きる喜びを感じるのはどんなときですか？



このアンケート結果を見ると、生徒たちが喜びを感じるのは、自分の好きなこと（趣味）の時間（23.1%）が最も多く、以下遊んでいるとき（10.6%）、寝ているとき（8.7%）と続く。少数意見として、人とかかわっているとき（3.6%）、人に感謝されたとき（1.4%）など他人とのかかわりに喜びを感じる生徒はいるものの大半の生徒は人とのかかわりというよりも、自分を中心に物事を捉え、自己満足しているという現状がうかがえる。そして自分本位ではなく人とのかかわりの中から生まれる喜び、人を思いやる気持ちや深い人間愛、さらにこれから成長するに従って求められる人としての誇りや気高さを生きる喜びとして捉える生徒は少ないと考えられる。

第一分科会では、中学生という多感なこの時期に、自分の内面をもう一度見直し、人とのかかわりの中で自分の中の弱さや醜さを克服し、強さや気高さを見いだしたときに得られる人間として生きる喜びとは何かを問いかける資料を提示し、教師と生徒が共に考える場を設定したいと考えた。資料を通して追体験することによって、近い将来直面するであろう様々な場面で、「生きる喜び」の価値を実現できるよう、道徳的実践力を育成することを指導のねらいとした。

(3) 指導の工夫

ア 資料の選定

道徳の時間に用いられる資料が備えておくべき要件は、道徳の指導書や解説書に示されているが、第1分科会では3-(3)「生きる喜び」を取り上げて研究するに当たっては、特に次のことを重視して選定を行った。

- ・生徒の感性に訴え、豊かな感動を与えることのできる資料
- ・人間の弱さや醜さに向き合い、生きる喜びや勇気を与えられる資料
- ・人間としてよりよく生きる意味などを深く考えることのできる資料

以上の観点で資料の選定を進めていくと、資料「ネパールのビール」は、筆者の吉田直哉氏にビールの買い物を頼まれた現地の少年が、その約束を守るために気高く行動する様子が表現されている。それとともに、なかなか戻らない少年に対して、お金を持ち逃げしてしまったのではないかと疑ってしまう筆者の人間としての心の弱さや醜さが表現されている。

このように資料「ネパールのビール」は、生徒にとって分かりやすく身近に感じられるものであり、なによりも選定に当たった私たち第一分科会の研究員にとって心に響く感動的な内容であったので、本資料を選定し研究を行うこととした。

イ 導入の工夫

導入は主題に対して生徒の興味・関心を高め、ねらいとする道徳的価値の自覚に向けて動機付けを行う段階である。

資料「ネパールのビール」を活用するためには、まず、生徒にネパールという国やそこに住む人々の様子、生活環境などを示す必要がある。生徒の日常生活とはかなりの違いがあるので、生徒が差別意識や偏見をもたないような配慮も忘れてはならない。

使用した教具は、アジア地域の掛け地図、ネパールの地形が分かる写真、貨幣価値などの資料で、特に山岳地帯の生活では、交通手段は徒歩に頼るしかないことを強調する必要があった。さらに、生徒が道徳的な価値について考えを深めるための時間を確保するために、視覚的に訴えるなど簡潔で分かりやすい提示の仕方も工夫した。

ウ 展開の工夫

○板書計画の工夫

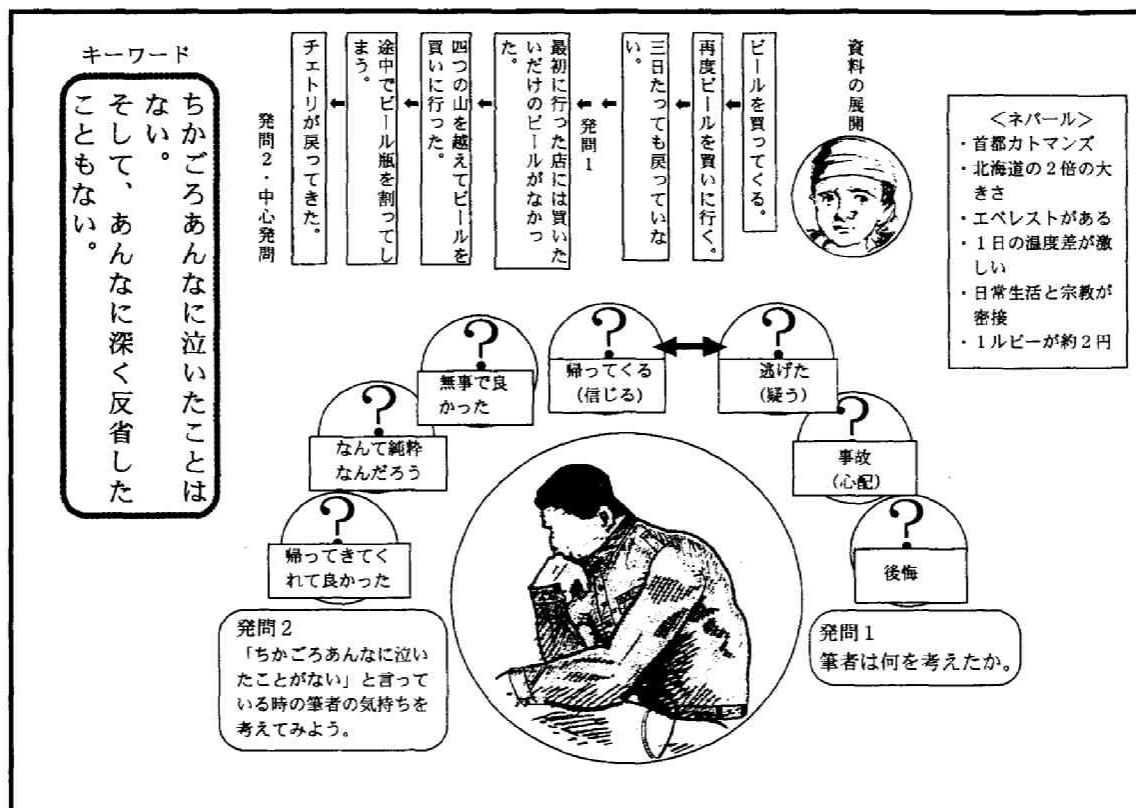
生徒がねらいとする価値についてじっくりと考える時間を確保するために、展開では特に板書の仕方を以下のように工夫した。

ストーリーをチェトリ君の行動に焦点を当てて振り返ることができるような短冊を作成し、それを黒板の上部に順に貼った。この短冊を貼りながら発問をすることによって、資料のどの部分における内容についての筆者の心情を考えればよいかを明確にした。

また、黒板の中心には筆者が悩んでいる姿を描いた絵を配置し、筆者が何を悩んでいるかを『?』として提示し、授業が展開していくに従って、発問に対する生徒の意見をカードに記入して、『?』の上から貼っていくこととした。このことは、筆者が思い悩む姿を視覚的にイメージしやすくする効果があると考えたからである。加えて、カードに生徒の意見を書いて貼っていく方法は、生徒の多様な考えを尊重しながら、スムーズ

に授業を展開できるという意味でも効果的であると考えた。

以上のことから板書の計画は次のようになる。



このような方法で授業を進めることにより、ねらいに近付いていく様子が、黒板に表れてくることになる。生徒に、今何について考えているのかを明確に理解させながら授業を展開できると考えた。

○発問の工夫

基本発問を設定するに当たり、以下のような配慮をした。

- ・発問は簡潔で、生徒に発問意図が明確に伝わるようにする
- ・発問は、ねらいに迫ることができるものに厳選する
- ・発問について考える時間は、生徒が発問の意図を理解し、まとめるのに十分な時間を確保する

以上の発問の工夫を行った上で、生徒がクラスの中には様々な考え方があることを認識することができるように発表を促す。そして、発表された内容から発問意図に沿った反応を黒板の『?』部分に上から貼っていく。この時に、生徒同士の活発な意見が交換されることが理想であるが、人前で自分の意見を述べることに自信のない生徒がいる場合には、意見をカードに書かせ、それを発表するという方法を工夫した。

○発問の精選

研究を重ねていく中で、常に発問については吟味してきたが、検討の初期の段階ではどうしても発問の数が多くなってしまった。しかし、授業のねらいを踏まえて、以下の観点から精選していった。

人間の弱さや醜さは発問1を通して考えることができ、強さや気高さは、チェトリ君の行動から認識できる。したがって、本授業のねらいに迫るためには、筆者の「ちかごろあんなに泣いたことはない。そしてあんなに深く反省したこともない」という、この文章の最後の言葉がキーワードになると考えた。それが、筆者のこの出来事以後の人生に大きく影響を及ぼしたと考えたからである。さらに、この発問に対して生徒たちが十分に考える時間をとることによって、ねらいとする価値に対する自覚を深めることができると考えた。

エ 教師の姿勢

ねらいとする価値に迫るためには、筆者の姿を通して、人間の弱さや醜さが特別な物ではないことに気付かせることが大切であると考えた。このことに気付くことによって、チェトリ君の気高さも引き立ってくる。人間のもつ、この二面性が自然であることを理解するような配慮が必要である。さらに、人間としてよりよく生きることこそが、生きる喜びにつながることに迫らなければならない。

したがって、話し合いの場面では、教師は生徒たちどの一人の意見をも否定することなく受け入れるとともに、教師も一人の人間として弱さや醜さと強さや気高さを併せもつ存在であることを知らせながら、生徒が率直に意見を発表できる雰囲気作りに努めることとした。

オ 終末の工夫

終末では、筆者が体験したこの出来事を、作品にして世に送りだした意味を考えることとした。このことにより人間が様々な体験を通して学んだことを励みにして、よりよく生きていこうとする姿を共感的に理解させたいと考えたからである。

さらに、教師の説話で授業を終えることによって、この指導内容を生徒の身近なことと感ずることができると考えた。

(4) 指導事例 (第2学年)

ア 主題名 「生きる喜び」(内容項目3-(3))

イ 資料名 「ネパールのビール」(暁図書出版 中学生の道徳「自分を考える」)

ウ 資料の概要

ネパールの取材に行った筆者を含む撮影隊は、荷物を軽くするためビールを持っていくことをあきらめた。しかし、思わず「ビールが飲みたい」と言った筆者の言葉を、地元少年チェトリが聞き、大人が歩いて一時間半はかかるチャリコットまでビールを買いに行った。そして、次の日も買いに行くことを申し出たチェトリに、筆者は前日より多くお金を渡して頼んだ。

ところが、チェトリは夜になっても帰らず、心配になった筆者は村人に相談する。村人や先生たちの「お金をもって逃げたのだ」という言葉に、筆者の気持ちは揺れ動いた。そして、三日目の夜、チェトリは泥まみれになって帰ってきた。

チャリコットの店だけでは足りず、山を四つも越えて買って来たというチェトリの言葉に、筆者は彼の肩を抱き泣いた。そして、「あんなに深く反省したこともない」という思いになった。

エ ねらい

人間はだれしものが弱さや醜さをもつ反面、気高さや崇高さも合せもっていることに気付かせ、その弱さや醜さを克服して人間として生きる喜びを見いだしていく態度を養う。

オ 指導過程

	指導の流れと主な発問	学習活動と予想される生徒の反応	指導上の留意点
導 入	資料の紹介（ネパールの地図上の場所・気候・生活スタイル・貨幣価値など）	<ul style="list-style-type: none"> ・山岳地帯なので寒い。 ・多くの自然が残されている。 	あくまでもネパールの紹介程度にとどめる。生徒が差別や偏見をもたないように配慮する。
展	<p>チェトリ君の行動とそれに対する周囲の人々の気持ちに注目できるように資料を読む。</p> <p>ストーリーを確認しながら短冊を黒板に貼っていく。（前半）チェトリ君が何日も帰ってこなかったところまで振り返る。</p>	黒板に貼られた短冊を見ながらストーリーを振り返る。	チェトリ君の純粹さとチェトリ君を疑った筆者や周囲の人々の弱さや醜さが伝わるように読む。視覚的に内容をとらえる工夫をする。
開	<p>発問1 ここで作者の考えたことは何か。</p> <p>黒板に貼ってある作者の内面を示す『?』のところに生徒の反応を貼っていく。</p> <p>再びストーリーを確認</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・大金をもって逃げた。（疑い） ・事故にあったのか。（心配） ・無事であってほしい。（願い） ・あの子はそんな子ではない。（信用） ・あんな大金を渡さなければよかった。（後悔） <p>黒板に貼られた言葉から作者の心の迷いを知る。</p> <p>黒板に貼られた短冊を見ながら内</p>	<p>作者の迷いについて十分共感できるようにする。多様な考えを引き出すようにする。</p> <p>生徒の発言が片寄った場合などには、ねらいに近付けるよう援助する。</p>

	<p>しながら短冊を貼っていく。(後半)最後までストーリーを振り返る。</p> <p>発問2 (中心発問) 「ちかごろあんなに泣いたことがない」とあるが、このときの作者の気持ちを考えてみよう。</p> <p>黒板の『?』のところに生徒の意見を貼り、作者の思いを整理する。</p>	<p>容を深める。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・無事に帰ってきてよかった。 ・純粹に約束を果たそうと頑張ったことに感動している。 ・疑った自分が情けなかった。 <p>人間には弱さや醜さがあることと強く気高く生きようとする部分があることについて把握する。</p>	<p>様々な視点から作者の心情をとらえられるようにする。</p> <p>ねらいにつながるように黒板の短冊を整理する。</p>
終	<p>筆者はなぜ5年もたってこの文章を書いたのかを考える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・人を疑ってしまったことを後悔したので、これからは人を疑うようなことなく、よりよく生きたいという思いから書いた。 	<p>よりよく生きたいと思い続け、それが喜びにつながるかを考えられるようにする。</p>
末	<p>教師の説話</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の人生に対する考え方を大きく変える出来事だから。 	<p>押し付けでなく、よりよく生きたいという気持ちになれるよう配慮する。</p>

カ 評価の観点

- ・人間は他の人を疑ってしまうほど弱さや醜さをもっているということを、素直に受け入れることができたか。
- ・人間はその弱さや醜さを乗り越える強さや気高さをもっていることに共感できたか。
- ・ありのままの人間の姿を率直に認め、弱さや醜さを乗り越えて強く生きていくことが生きる喜びにつながるという思いになれたか。

キ 授業記録 (一部抜粋)

- T 2回目にビールを買いに行き帰ってこなかったとき、筆者の考えたことは何でしょう。(発問1)
- S お金をもって逃げた。
- S 事故にあった。
- S 大金を渡したことを後悔した。

S きっと帰ってくる。

S 心配だ。

T 「ちかごろあんなに泣いたことはない」とあるが、このときの筆者の気持ちを考えてみよう。(発問2)

S 疑ったことを後悔した。

S チェトリ君が誠実だったこと。

S 帰ってきてよかった。

S 心を打たれた。

S ちゃんと帰ってきたことに感動した。

T 筆者はなぜ5年もたってからこの文章を書く気持ちになったのでしょうか。(発問3)

S 5年たってネパールでの出来事がいろいろ勉強になった。そしてこの出来事をみんなに知ってもらって、こういう場面になったらどういう気持ちになるか……。

S 世の中捨てたもんじゃない。チェトリ君のようにいい人はまだまだこの世にはたくさんいるということを読む人に伝えたかったのだろう。

S あの感動を忘れないように文章に残し、チェトリ君の純粋な気持ちを世の中の人々に知ってほしいと思った。自分のためでもある。

S 人を信じる大切さを思い出しながら書いたのだと思う。

S 近ごろあんなに純粋でいい人を見たことがない。自分のための買い物を頼んだのに、チェトリ君は一生懸命に買い物に行ってくれた。そしてチェトリ君を疑ってしまったという思いから。

ク 考 察

授業で最も工夫した部分は、板書と発問の仕方である。板書については、短冊などを利用し、筆者の思い悩む心情を視覚的にとらえられるようにした。それによって、生徒は短時間で資料の流れを理解し、発問に対して十分に考える時間を確保できた。また、自分たちの意見が次々と黒板に貼られることによって、多様な意見を引き出す上でも効果的であった。

発問については、まず、その数を精選することとした。その結果、一つ一つの発問に対して生徒の思考する時間を多くかけることができた。また、同じ発問意図であっても、表現が異なると生徒の反応も違ってくるのが分かった。例えば、終末の発問では、「この出来事から5年後、筆者はどのような気持ちでこの文章を書いたのか」という発問と、「筆者は、なぜ5年もたってこの文章を書く気持ちになったのか」という発問では、生徒の心への響き方も異なり、生徒の反応やねらいへの迫り方も変わってくる。発問の仕方がいかに重要であるかを知らされた。発問に対して、意見の発表のさせかたは、生徒の実態に応じた工夫をしなければならなかった。意見がでにくい学級の場合には、教師が指名して発言させるほか、カードやワークシートなどを配布して、自分の考えを書かせるような工夫も行った。いずれにしても、道徳の時間の活発な話し合いを期待するためには、教師と生徒、生徒相互の信頼関係が大切である。

3 第1分科会のまとめ

第1分科会では、生徒の実態をふまえ内容項目3-(3)「生きる喜び」についての研究を進めた。

「生徒の心に響く」とは、生徒の心の中に潜在する気持ちが、道德の時間の活動を通し、勇気がわいてきた、自信がもてた、自分に欠けていた部分を素直に見つめることができた、などに変化することであると考えた。

「生徒の心に響く道德の時間」にするために、特に、板書計画と発問の工夫の2点に重点を置いた。

板書の工夫では、ストーリーを振り返ることのできるような短冊を作成し、黒板に貼り、資料のどの部分における内容について筆者の心情を考えればよいかを明確にした。

また、黒板の中心に筆者の葛藤の様子を視覚的に示すことにより、ねらいとする価値に迫れるようにした。

本資料を使用して数校で授業を行ってきたが、最初は発問の多さから中心発問にかかる時間が十分にとれず、思うようにねらいに迫れなかった。そこで発問の工夫として、発問を精選し中心発問に十分な時間がかけられるようにした。

私たちは、生徒が活発な意見交換のできる授業ということで研究を進めてきたが、学級によっては、自分の意見を言いたがらない生徒、もしくは意見をもっているという勇気のない生徒も数多く見られる学級もあった。そこで生徒が自由に意見を発表できる雰囲気作りと同時に、自分の意見をしっかり言えるための方法を工夫することにした。その一つが「カード」の使用である。「カード」とは、自分のつぶやきのような、心に浮かんだ言葉をそのまま書くというもので、文章が苦手な生徒、考えることを面倒に思う生徒も、気軽に書けるようにしたものである。ここに表れた生徒の気持ちを大切に教員が取り上げ、共感する中で少しずつ意見を言える勇気と力を養っていくことが大切であると考えている。

成果と課題を以下のようにまとめた。

(1) 成 果

ア 発問を精選したことにより、中心発問に十分な時間時間をかけられるようになり、ねらいに迫ることができた。

イ 板書の工夫により、資料の理解が深まり、板書時間の短縮にもつながった。

ウ 同じ発問意図でも、発問の仕方によって、生徒の反応やねらいへの迫り方も変わることが分かった。

エ 「カード」の利用により、なかなか自分の意見を言えなく、授業に積極的に参加しなかった生徒も徐々に授業に参加するようになり、生徒の表情が生き生きしてきた。

(2) 課 題

ア どの資料を使用するかが、ねらいに迫れるかに大きく影響することがわかった。他の資料も含め、資料の選定を続けていく必要がある。

イ 「カード」の利用はあくまで意見を発表する力をつけさせる訓練の過程であり、今後はさらに活発な意見交換のできる授業を目指し、発展させていかなければならない。国語科をはじめ他教科との連携も考えていきたい。

Ⅲ 内容項目4-(1)「集団生活の向上」についての指導(第2分科会)

1 主題設定の理由

人が生きていくときには必ず集団に属し、集団の中で生活をしている。その集団には血縁集団(家族)、地縁集団(地域)、機能集団(学校、学級、クラブ)等がある。集団というのが単なる人が集まった集合体や、一人一人に目的意識がなく、支え合うこともないような集団では望ましい集団とは言えない。私たちは、「望ましい集団」を以下のように考えた。

- ・自分の所属する集団の意義を理解し、共通の目的をもっている。
- ・自分の役割や責任を自覚し、一人一人の個性が活かされている。

生徒がこのようなことを踏まえて行動していくことにより、個々が向上し集団の目標が達成される中で集団の向上が図られ、自己実現もなされると考えた。

ところで、目の前にいる中学生に目を転ずると、人間関係の希薄化、規範意識の低下など、様々な課題があり、小さな集団の中で心の安定を得ようとする様子が見られる。したがって、集団生活の向上に努めるといふよりもむしろ、自分自身の利害関係で行動するような傾向も見受けられる。

一方では自己の役割を自覚し、行動しているように見える生徒でも、自分が与えられた仕事以外には関心を示さず、他への積極的な働きかけをしない場合もある。他方、部活動等の集団において目的に向かって一致協力して取り組んだり、学年や学級が協力して一つのことを作り上げたときの成就感を経験したりするなど、集団としての目的が明確化されているときには、自己の役割を自覚して行動することができる。

生徒のこうした面に着目して、自らの所属する様々な集団において、成員相互が深くかかわりあって相互理解を深め、それぞれの集団で人間的な成長を遂げていくよう指導していくことが大切であると考えた。

変化が激しい21世紀を生きていく中学生にとって、他者とどうかかわり、自分がどう生きていくかを考えていくことは、集団や社会と人間とのかかわりへの理解を深める上で重要である。そのために自分が所属する集団における役割と意義を明確に認識させ、他者と協力しながら自己の役割を責任をもって果たそうとする態度を養うことが求められている。加えて、生徒一人一人が個性を失わないように留意して、それぞれののびのびと自らのよさを発揮できるような集団の在り方を考えさせたい。

以上のことから、第2分科会では「心に響く道徳の時間の指導」として、内容項目4-(1)「集団生活の向上」を取り上げることにし、内容項目のとらえ方、生徒の実態、教材の選択、発問の工夫等について以下の仮説を立て、研究を進めることにした。

仮説

他人の意見や考えを聞き、自分の心の中の気持ちとの葛藤を繰り返すことにより、共感を覚えたり新たな発見をすることができるであろう。

その結果、自己の役割と責任を自覚し、自分勝手な行動や考えを自制することにより集団生活が向上していくであろう。

2 研究の内容と方法

(1) 内容項目4-(1)のとらえ方

内容項目4-(1)は、「自己が属する様々な集団の意義についての理解を深め、役割と責任を自覚し、協力し合って集団生活の向上に努める。」である。

「自己が属する様々な集団」というのは、部活動・クラブのような自ら選んで入った集団や学級や委員会のように意図的に作られた集団、さらに地域に基づいて作られた集団や血縁に基づいた家族などが挙げられる。

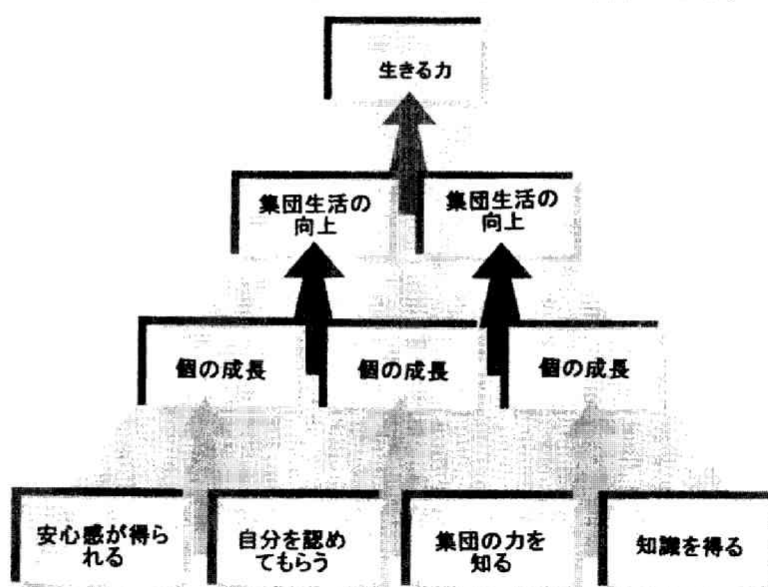
人間は決して一人では生きていくことができない。必ず、何らかの集団に属している。そしてどの集団においても、自己の役割と意義があり、よりよく生きていくために、自らが属する集団の意義を理解し、役割や責任を自覚する必要がある。学校生活の中で、生徒たちは、ともすると自らの意思とはかかわらず意図的に作られた集団の中では、十分に自分の役割や責任を果たそうとしない場合も見られる。

そこで私たちは、学校生活の中で、特に学級集団に焦点を絞り、役割と責任を果たしていくことができるような内面的な資質を育てたいと考えた。

学校生活の中で集団生活を向上させていくためには、まず成員同士の人間関係を築いていくことが大切である。生徒たちが学級活動や委員会活動などに参加している時の様子は、時に排他的な考えに左右されてしまったり、自分と仲のよくない成員には無関心であったりする。学校生活では、集団の目標や意義を理解させ、協力し合って、自己の役割と責任を果たせるようにしていくことが必要である。具体的に、集団の良さを実感できるということについて、私たちは四つの場面を考えた。(図1参照)一つめは、友達と一緒にいて安心感が得られたことがある場合、二つめは他人が自分をほめたり、認めてくれたときの喜び。三つめは、自分一人ではできないことができたと感じること、そして四つめは、情報交換の中で様々なことを知ることができたという充実感を感じることができたときである。

集団を高めていくためには、これらの四つの場面を体験することによって、各自が成長していくことが重要である。個が成長すれば、集団としての機能は確実に向上する。集団としての機能が向上すれば、実行力や活力が高まり社会に出たときに生きていく力になる。

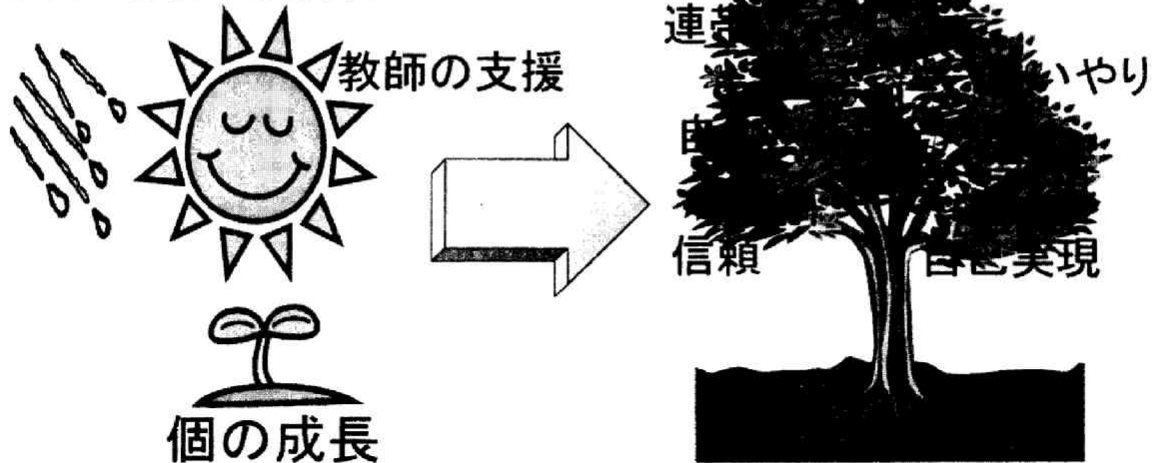
私たちは、個の成長を一本の木にたとえてみることにした。木は、家庭や地域の教育力や、教師の支援などを通して一本の立派な木に成長する。そして、その木は友情・思いやり・連帯・協力・自己実現・信頼・自主自律といった実をつける。実のつけ方によって様々な個性がつけられる。その一本一本の個性が集まって、



(図1)

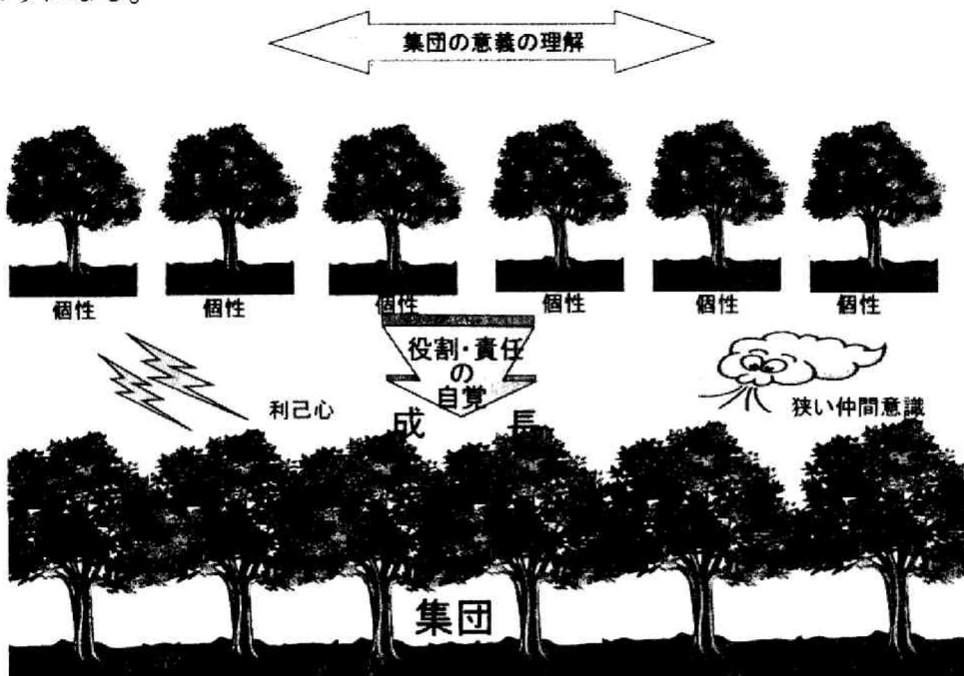
集団という森を作る。個々の木は自己の役割と責任を自覚し、しっかりと根をはり、雷（利己心）や強風（狭い仲間意識）にも負けない集団を形成していく。森の機能を充実したものにするためには、集団のあり方（意義）を理解していくことが重要である。森の循環を考えると、熟した実は種となって大地に返り、その後新芽が出て成長して木になり森を形成していく。そして森は、さらに大きな森へと成長し変化をとげていくのである。（図2）

家庭・地域の教育力



(図2)

個々は、自分の利益のみを求めるのではなく、お互いに譲り合い、協力し合えばよりよい関係を作ることができる。そしてお互い自信がもてるようになる。さらに、集団の大切さに気付き、集団の中で自己の役割を果たそうと努める。責任や役割を実行することにより、充実感も生まれる。それが活力になり、集団は活性化されていく。以上述べてきたことを表すと図3のようになる。

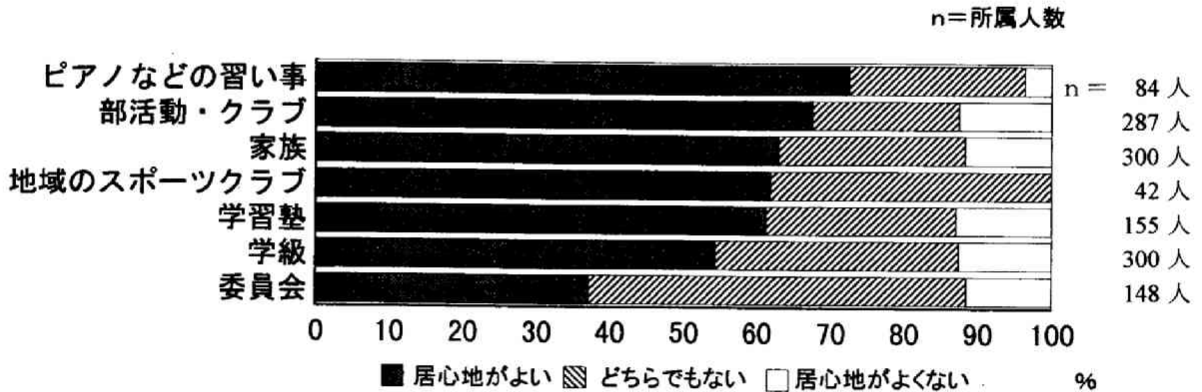


(図3)

(2) 生徒の実態

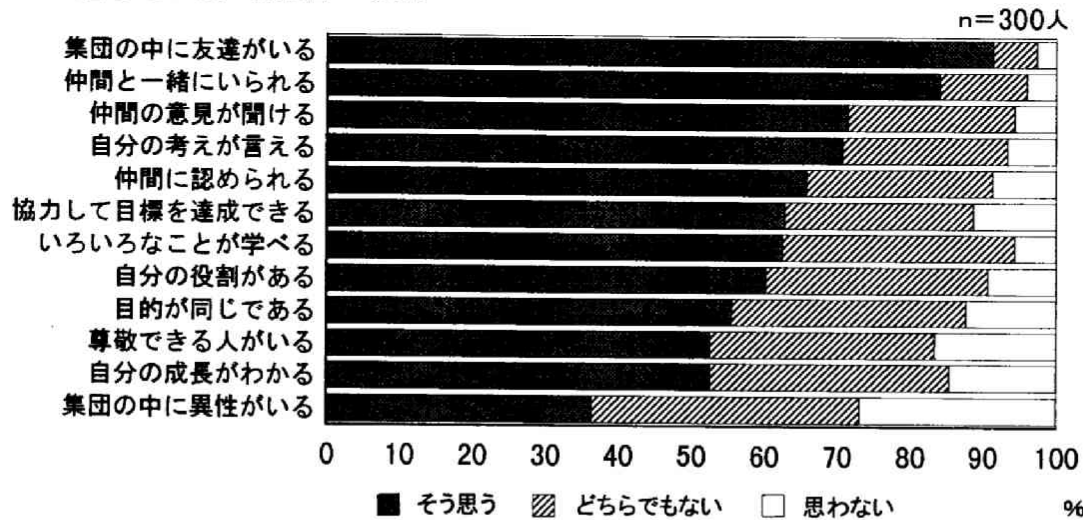
第2分科会では、都内中学校7校、300人（各学年100名程度）を対象にアンケートを実施してみた。（調査年月：平成11年10月）

ア 自分が所属している集団についての意識



部活動・クラブ・地域のスポーツクラブ・習い事等については、「居心地が良い」と感じている生徒が上位を占めている。また、学級・委員会等の集団については、「居心地が良くない」または「どちらでもない」と回答した生徒が半数を占めている。

イ 「居心地が良い集団」の条件



「友達がいる」「仲間と一緒にいられる」が上位を占めており、「自分の成長がわかる」「尊敬できる人がいる」「目的が同じである」「自分の役割がある」と回答した生徒は約半数にとどまっている。

以上の点から考察すると、生徒は自分が望んで入った集団については、「居心地が良い」と感じているが、学級や委員会のように意図的に作られた集団については、必ずしも「居心地が良い」とは感じていないようである。

また、集団＝仲間（友人）と一緒にいる（いられる）という程度の捉え方であり、お互いが成長しようとする意識や、お互いを啓発し合って高めていこうとする姿勢は、あまり見受けられない。また、集団生活の目的や意義、自己の役割や責任に対する意識も高くはない。

(3) 指導の工夫

ア 資料選定について

道徳の授業では、資料として読み物を使用することが多いが、人間としての生き方について生徒たちが自覚を深めることができる資料は、ある程度の長文になり、内容的にも深いものが多い。そのため、生徒が一読しただけでは描かれている状況や登場人物の心理まで十分に把握できない場合もある。

授業を構想する上で、資料の選定に当たって、単に言葉や知識のやり取りだけで授業を進めるのではなく、生徒自身が感情を直接共有して、心情面からの資料理解ができるもの考えた。そこで演劇の脚本を使用し、生徒に朗読劇をさせることが有効ではないかと考えた。また、脚本選定の観点として

- ・生徒が身近な問題として感じられるもの
- ・集団の向上、集団の一員としての役割、責任について考えさせることができるもの
- ・集団の中のいろいろな人の心の変化が現れているもの
- ・教材として斬新なもの

などを考えた。これらの条件を満たすものとして「棄権」の脚本が、資料として適切であるとして選定した。

資料「棄権」〔小野川 州雄 作〕の概要

3年B組では、秋の運動会で、10キロマラソンの選手を決めることになった。その話し合いの結果は、スポーツ万能で自信家な三上や、責任感の乏しい谷口、自信はないが虚勢を張っている関根などの意見によって、棄権することに決定した。

しかし、肺活量が1600ccしかない主人公の小森が「棄権はよくないよ」と選手に立候補して周囲は一瞬驚くが、その後、小森をあざけり笑う。田代、堀内以外、クラス全員が小森の立場を考えずに無関心な態度をとり、小森が選手に決定する。田代、堀内は学級代表だが、強く自分の意見を出せない。マラソンが始まった頃、関根が学校をさぼっていたことが分かり、田代に連れてこられる。関根は400メートル1位の三上をねたみ、賞状を破いてしまう。関根が運動会でビリになることの屈辱について、心の中の思いをぶつけたことにより、自信のない桜井が右足が痛いという嘘をついて棄権をしてしまったことなど、弱い心をみんながさらけ出した。フラフラになって帰ってきた小森の姿を見て感動し、クラス全員が心をひとつにして応援をした。小森は薄笑いを浮かべ、崩れるように倒れて、病院に入院する。彼は入院中、学校へ行きたくないという気持ちで一杯である。そこへ3年B組一同から手紙が届く。

イ 朗読劇の有効性について

資料「棄権」の配役16人とその朗読劇を聞く他の生徒は、単に脚本を資料として読むだけよりもその場の状況や登場人物の感情に直接共感することができる。また実際に登場人物になりきったり、他人の演技を客観的に見ることにより、登場人物の立場や気持ちを理解し、心情面からの資料理解を可能とし、資料を具体的に理解する方法として有効であると考えた。

役割演技の特質を生かすために次の点に留意した。

- ・配役は生徒の希望を尊重する。
- ・役になる生徒については事前に読み合わせの練習を2回程度行う。
- ・内容理解を深めるために教師が必要な演出をする。
- ・効果音を使用する。
- ・登場人物の名札を、朗読劇を見ている生徒に見やすいように腰に着ける。
- ・登場人物は、せりふを言う場面では立つ。
- ・場面転換の表示をする。
- ・場面の状況が詳しく分かるように、ト書きをナレーターが読む など

ウ 授業展開の構想

生徒に、「集団の意義を理解させ、集団がもつ価値や重要性に気付かせ、さらによりよい集団を築いていこうとする心情を養う」ことがねらいである。資料提示に参加した生徒の演技を活かした話し合いを大切にしたい。まず、役になった生徒から、自分の気持ちや考えと並行して、登場人物の気持ちや考えを発言させる。次に、実際の役を演じた生徒とそれ以外の生徒の立場から意見や思いを出し合あうことによって、生徒は多様な考え方や感じ方があることを知ることができる。

生徒は、集団生活の向上のための規律、責任、役割、自制、協力についての大切さは知識としては知っていても、実際の行動に起こそうとする意欲や態度は十分ではないことがある。人の心は、他の人の気持ちや考えを知ることによって変化する。そしてそれまでは気が付かなかった相手の気持ちを知ることにより、自分の心を振り返り人間関係を大切に育て励まし合う協力関係も生まれ、集団生活の向上のために行動を起こそうとする意欲や活力に大きな影響を与える。生徒が集団生活の向上のために自分の役割や責任を果たしていくことができなかつたり、できる自信がなかつたりするのは何が原因なのかについてお互いが、率直な思いや意見を出し合い、克服していくための糸口が集団の成員同士の日常の人間関係を深めていくことに気付かせたい。

エ 中心発問について

中心発問に至る前に、まず、「棄権は良くないよ」と言い、マラソン大会で最後まで走りきった小森くんの気持ちはどのようなものだったのかということと、3年B組が自分勝手な無責任な集団であることに触れることが必要である。そこにはバラバラだった3年B組の姿があり、中心発問を考える上での出発点になる。

中心発問において、3年B組のクラスの雰囲気や、お互いを尊重し合おうとするクラスに変わっていった事実とその過程を生徒に理解させることが大切である。生徒は登場人物の心の変化を自分の気持ちと照らし合わせて考えていくことで、現時点での集団の一員としての自分の心のうちを自覚するのである。そして「集団の一員としてのあり方」と「現実の自分の行動・考え」の違いを見つめていく。

(発問)「どうして3年B組のクラスが、一つにまとまっていったのか」は、小森がマラソン選手を引き受けたことや、関根が本音をさらけ出したことによって、学級の一人一人が自己中心的な言動を反省し、集団の一員としての自覚を深めていくことをねらいとし

た発問である。個や集団（クラス）の変容した要因について焦点を当てながら、生徒に考えさせることを意図している。

生徒は、登場人物の変化していった考えや行動と現実的な自分の考えや行動とには差があることに、多少なりとも気が付くであろう。話し合いの中で、生徒がその差を埋めようとする気持ちをもったり、方法を求めようとしたりすることが、集団生活の一員としての在り方を身に付けていく機会となるのである。

オ 1 単位時間の弾力化について

授業の1 単位の時間は50分を常例としてるが、この脚本を使用しての指導過程を構想していく上では、60分の授業計画を立てた。それは、資料提示理解のための時間を長く必要とするからである。今後、体験的な活動を生かした道徳授業の展開や心に響く教材の使用などの視点で授業の指導計画を立てる上で、1 単位時間を50分と限定せずに、効果的に指導できる必要な時間を設定して、1 単位の時間を弾力的に使用することも大切である。

(4) 指導事例（第2 学年）

- ア 主題名 「集団生活の向上」〈内容項目4-(1)〉
- イ 資料名 「棄権」 作 小野川 州雄
- ウ 集団がもっている価値や重要性に気付かせ、よりよい集団を築いて行こうとする心情を養う。

エ 心に響き合う活動の工夫点

- ・役割分担をして、体験をさせながら資料を提示する。
- ・一番印象に残っている場面やセリフを聞くことにより、感じ方の違いを認識させ心を響き合わせる。
- ・班で話し合わせることにより、他の成員の意見に共感したり、相違点を認めたりしながら新たな発見をする。
- ・指名構想を考えておく。

オ 指導過程

	指導の流れと主な発問	予想される生徒の反応	指導上の留意点
導 入	1. マラソンの写真を見せ どんなイメージをもっているか発表させ導入とする。	<ul style="list-style-type: none"> ・きつくて疲れる。 ・苦しい。 	
展 開	2. 資料「棄権」の朗読劇 をあらかじめ決めておいた 有志の生徒（16人）で演じ る。 3. 劇終了後、あらすじを 配布し、登場人物名を掲示 する。		<ul style="list-style-type: none"> ・集中して聞く雰囲気 ができてから朗読 劇を始める。 ・あらすじの配布は 内容理解のためであ る。

展	<p>4. 資料に即して考える。 ○「一番印象に残っている場面やセリフはどこでしょうか。」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・小森君が「棄権はよくないよ」と言ったところ。 ・関根君が自分の気持ちをみんなの前で告白している場面。 ・小森君がフラフラになりながらも立ち上がって完走したシーン。 ・看護婦さんが、手紙を読み終えたところで、小森君が「おれ夕食たべるよ!」と言った場面。 ・バラバラだったクラスのみんなが最後「小森、立てよ!」と心を一つにして応援した場面。 	<ul style="list-style-type: none"> ・印象に残った場面を板書し、セリフについては、登場人物の名前のカードを使って分類しながら板書する。 ・演技者に登場人物の印象を聞く。 ・自分の意見を自由に発言できる雰囲気を作る。
	<p>【発問】 マラソンの選手を決めた時の3年B組のクラスの雰囲気はどのようでしたか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・バラバラだった。 ・みんな自分勝手なことを言っていた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・朗読劇を活かし、小森君や他の登場人物たちの気持ちを考えさせる。
	<p>【中心発問】 どうしてそんなクラスが一つにまとまっていったのですか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・小森君が頑張ったから。 ・意見をぶつけ合い自分と異なる意見を知ることができたから。 ・話し合いの時に、もっと真剣に考えるべきだったと気付いたから。 ・心の弱さを見せ合って、何でも言える雰囲気ができたから。 ・協力することの大切さを学んだから。 	<ul style="list-style-type: none"> ・班ごとに話し合わせる。 ・小森以外の登場人物の気持ちの変化を考えさせる。 (人間関係を大切にして励まし、協力し合う集団へと変化した要因を探らせる) ・相互指名をする。
	<p>【発問】 「看護婦さん、おれ夕食たべるよ!」といった小森君の気持ちはどんなだったのだろう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・初めてクラスの大切な一員として認められて少しうれしかった。 ・投げやりな(存在感のなさを憂うような)気持ちが薄れた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・小森がクラスという集団の帰属意識に気付いたことを考えさせる。
終	<p>5. 教師の説話。 《生徒が友人に宛てて書いた励ましの手紙を読む。》</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・考え方の違いをお互いに認め 	<ul style="list-style-type: none"> ・合唱コンクールでの体験談や生徒の手紙を通して、心に響

末	<p>自分の考えや感想をワークシートに記入し、まとめをする。</p> <p>○この朗読劇を通して、感じたことや考えたことをまとめめる。</p>	<p>合い、協力し合うことが大切だということが分かった。</p> <p>・自分ができそうなことは、みんなのために積極的に行う。そして、責任をもってやりとげなければならない。</p>	<p>く指導を心がける。</p>
---	---	--	------------------

カ 評価の観点

- ・集団の意義や価値、重要さを理解することができたか。
- ・集団生活を向上させていくためには、友情や信頼を深めたり、深い人間関係を築いていくことが大切であるということに気付いたか。
- ・心に響き合う指導方法が工夫されていたか。
- ・脚本を使うことで、生徒の多様な考え方を引き出し、心に響く指導になったか。

キ 生徒の感想から

- ・みんながお互いのことを理解し合えば、より良いクラスができると思った。一人の力ではできないことでも、クラス全員で団結すればやれることが分かった。
- ・友達は励ましてくれるからいいなと思った。
- ・言いたいことがはっきりと言えるようなクラスになるとよいと思った。話し合いでは、決してはやしたてずに一人一人の意見を尊重する態度をもつ必要がある。
- ・自分のことばかり考えずに、みんなの気持ちを考えて動くことが大切だ。
- ・小森君は、最後に何を言いたかったのだろうか。
- ・こういう話し合いはクラスのためになるので、どんどんやっていくべきだと思った。
- ・体の弱い小森君でも、みんなにパワーをあげられるんだなあと考えた。

ク 授業の考察

上記の感想にみられるように、生徒たちは、「集団」の在り方とはどうあるべきかを一生懸命考えようとしていた。役を演じた生徒に、最初の発問で、人物像などをさらに聞くと、活発な意見を言い合える雰囲気を作り出された。このことが中心発問で、登場人物たちの心の変化を追っていくことにも有意義に働いた。

指導過程を構成する段階で、「お互い協力し合えるクラスにするためにはどんなことを心がけたらよいか。」という発問を最後に考えたが、行動目標に近いものになることが予想されたので削除した。

話し合いでは、班単位での意見交換や相互指名の形式をとったが、仲のよいグループで発言を回すことも多かった。生徒に、場面を思い出させるために、朗読劇終了後、あらすじを配布し、登場人物の名前を掲示することにした。

心に響く状態というのは、感動を共有することから始まる。相手の発言を受けて、共感したり、反問したり、葛藤したりしながら、道徳的判断力を高めていくことが最も大切なことである。一方個々の意見によって、心の響き合う状態を作り出していくためには、どのような工夫を続けていったらよいのか研究を深めていくことが課題である。さらに板書計画にも工夫をしていく必要があることが今後の課題として残った。

3 第2分科会のまとめ

第2分科会では、研究主題である「生徒の心に響く道徳の時間の指導」についての指導を展開するに当たって、内容項目の検討を行い、最終的に内容項目4-(1)「集団生活の向上」についての研究を進めることとした。

人間は様々な集団の一員として生活を営んでいる。中学生も例外ではない。しかし、この時期の生徒は、気の合う仲間同士や所属する小さな集団にのみ目が向きがちであり、自分とかわかりが薄いと思われる集団や成員に無関心であるばかりか、排他的になる傾向がある。また、集団内では成員間での対立や摩擦を避けるために、かわりあいが浅い表面的なつきあいをしたり、他に迎合し自分の考えを言わない者も多い。

このような傾向をもつ中学生に、あえて学級の集団生活で起こる問題を考えさせることで、葛藤を起し、道徳の授業を生徒の心に響くものにしようと考えた。

また、道徳の授業を進めるに当たって、資料は学校演劇の脚本である「棄権」を選んだ。運動会の選手決めという生徒の身近な題材で、生徒が意見を出しやすいものであることと、実際に生徒が劇を演じることで資料の理解が深まること、選定の理由である。また、生徒の話し合いを進めることで、生徒が、他の生徒の意見を聞き、自分の考えを変えていく、「心の響き合い」ができるような指導法を工夫した。

(1) 成 果

ア 資料を朗読劇の形式で生徒が演じたことにより、資料への関心が高まり、登場人物の心理状態などへの生徒の理解が深まった。また、資料に感動を覚えた生徒も見受けられた。

朗読劇の形式での資料の提示は、道徳の時間を生徒の心に響くものにしていくために有効であることが分かった。

イ 今回選定した資料「棄権」は身近な内容を取り上げ、学校生活での実際の体験と照らし合わせて考えやすく、ねらいを達成するのにふさわしい資料であった。

ウ 教材の提示、発問の精選、発問の仕方、話し合いの仕方、板書の仕方等、指導方法の工夫をしたことにより、生徒の話し合いが活発に行われた。

エ 話し合いの中で、他の生徒の意見を聞き、自分とは違う考え方や自分では考えつかないような考え方もあることに生徒が気が付き、それを受けて自分の考えを深めることができた。

(2) 課 題

ア 資料を朗読劇の形式で生徒に演じさせるためには、事前の準備として配役の決定、脚本の読み合わせが必要である。

イ 今回の脚本を上演すると資料の提示で約25分かかる。このあとの生徒の話し合い活動の時間もふくめると授業時間が60分以上になる。道徳の授業にこの資料を取り上げる場合は、1単位時間を弾力的にすることが必要である。

ウ 生徒の実態に即し、感銘を与え深く考えさせる資料の選定や様々な指導方法の工夫を図りながら、「生徒の心に響く道徳の授業」を更に目指していく必要がある。

Ⅳ まとめと今後の課題

平成10年に公表された、中央教育審議会の「幼児期からの心の教育の在り方について」答申で、心を育てる場としての学校を見直す、そのかなめとなるのが道德教育であると提言している。

私たち研究員は、その提言をふまえ、生徒の心を育てる道德の時間は、「生徒の心に響くような時間」にしなければいけないと考え、昨年に引き続き「生徒の心に響く道德の時間の指導」を研究主題として設定した。

本年度は第1分科会が内容項目3-(3)「生きる喜び」を、第2分科会が4-(1)「集団生活の向上」を取り上げた。各分科会ともアンケートを取り、生徒の実態の把握に努めた。また意見のやりとりが活発に行われるよう、資料選定と活用、発問の工夫などを行った。さらには、教師がともに悩み、学び、感動を共有することによって、生徒の心に変化が現れると考え、人の意見に共鳴・共感する、新しい発見をする、そのような心の変化によって、心に広がりができ、そこに道德的価値が高まり、また道德性が深まっていくのではないかと考えた。

第1分科会では、生徒の実態を知るためのアンケートにおいて、人とのかかわりの中から生まれてくる喜びを、生きる喜びと感じている生徒は少ないという結果が現れた。その喜びに気付くことのできる感動的な資料を選定した。しかし、最近の生徒の特徴として、無関心で自分の意見を言わなかったり、感動的な資料を提示するだけでは、活発な意見交換のできる授業をすぐに行うことは難しいということがあげられた。そこで学級の雰囲気作りの工夫や、板書の工夫、発問の工夫などを取り入れてみた。今後の課題として、生徒がさらにまとまった意見が言えるよう発展させていくような指導の工夫が必要である。

第2分科会では、気の合う仲間同士や小さい集団にのみ目がいき、そうではない仲間には排他的で無関心になる傾向が強い中学生に、あえて集団生活で起こりうる問題を考えさせることで、葛藤を起こし、主題につなげようと考えた。また話し合いを進めることで、他の意見を聞き自分の考えを変えていく「心の響き合い」ができるよう発問を十分検討するなど、工夫をした。

資料として身近な内容の脚本を朗読劇の形式で提示し、生徒の関心を高め理解を深めることができた。しかし、事前準備に時間がかかる、授業の1単位時間の弾力化の必要性、さらに指導の工夫をしていかなければならないなどの課題がある。

今なお、道德の時間の確保がされていない現状がある。授業を行うに当たっても資料の選定が難しい、教材研究ができない、さらに道德の授業の仕方をどうしたらいいのか分からないなどの悩みを抱えている場合も多い。一人一人の教師の道德に対する意識の差も、大きな問題点として考えられる。ただ資料を読むだけの授業や、教師の話を受動的に聞くだけにとどまっている現状もある。こうした課題を踏まえ、「生徒の心に響く道德の授業」を目指すため、まだ工夫の余地はある。

新学習指導要領で、平成12年度から道德は全面実施される。そこでは、学校教育における道德教育は、教育活動全体を通して行われるが、中でも道德の時間の役割と重要性はそのかなめとして強調されている。今年度の研究を通じて、やはり「道德の授業を継続することは大切だ」と実感することができた。心に響く授業を展開するためには、我々教師のたゆみない努力と熱意と工夫が必要である。それが必ず生徒の心を揺さぶり、道德的価値の自覚が深まることを訴えて私たちの研究のまとめとする。